

女性にもっと優しいクルマ社会への期待

竹岡 圭

(モーター・ジャーナリスト)

伝説の方向音痴

ただでさえ、交通音痴なんて言われがちな女性にとって、ITSなんて言われてもピンとこなかったりするのだけれど、実はすでに多大なる恩恵を受けていたりする。まず手始めにカーナビゲーション。『話を聞かない男、地図が読めない女』なんていう本があったが、事実、女性は地図が読めない人が多い。何を隠そう、月に2,000～3,000km、多いときは5,000～6,000kmの道路を走り回っているこの私も、歴とした地図が読めない女性のひとりだ。

なんでも女性は空間認識能力が、男性に比べると弱いんだとか……。確かに立体的に地形を判断するのは難しい。ピンポイントでの場所は把握できるのだけれど、点と線がどうしてもつながらないのである。恥ずかしながら、私の場合、東京生まれの東京育ちだというのに、銀座4丁目の交差点と数寄屋橋のソニービルが同じ道に存在するというのを、ほんの数年前に把握したという有様だ。

だからもちろん、地図を読まなきゃいけないときは、グルグル、グ〜グルグル地図を回してしまう。回しすぎて、目が回ってしまったときは、人に聞く。辺鄙なところで、周りに人が見当たらない場合や、本当に自分がどこにいるのかわからなくなってしまった場合は、道に詳しい人に電話する。

「右手にね、東京タワーが見えて、左手に森みたいなのが見えるんだけど、私どこにいるんだと思う？」運悪く電話を受けてしまった人にとっては、さぞかし迷惑な話だろうが、迷子の子猫ちゃんになってしまった私にとっては、このラインは命綱。ああ携帯電話がある時代



「私も“地図が読めない女”…」

でよかった！なんて、心底痛感してしまったりするのだ。もちろん、なんとかして一度道を覚えたところに行くときは、渋滞だろうがなんだろうが、同じ道でしか行かない(行けない!)。島国日本、海を渡らない限りは、どこかで道はつながっているはずなのだから、ちょっと理解できれば、もっともっと道も時間も有効に使えるのになあ……。とは思うのだが、伝説の方向音痴と謳われただけあって、もうこればかりはどうしようもない。なんたって、私の方向感覚は、GPSとはつながってないのだから。

“至れり尽くせり”のナビ・システム

そして時は過ぎ……。私の愛車には、言わずもがなナビゲーションシステムが装着されている。普及当初のナビは、お世辞にも出来がいいとは言えず、自車位置が道を外れて海の中に表示されたり、道案内でもとんでもない遠回りをさせられたり「これなら、私のほうがまだマシじゃん！」なんて、かえって泣かされることも多々あったが、それでも自分がどちらの方向を向いているのかわかるだけでもありがたかったりしたものだ。

それが、いまのナビときたら、例えば個人の家を訪問するときでも、番地までキチッと入力すれば、それはもう玄関の前まで、見事に案内してくれる。

さらには、VICSなどと連携しているのだから、渋滞を

避けたりする離れ業も持っていて、そのときの状況に合わせたルートまで考慮してくれたり、至れり尽くせりである。時間をお金で買うなんていう言葉があるけれど、私の場合、買った瞬間に元が取れてしまいそうなくらいのお役立ち具合なのだ。

また、さらにさらに最近のナビは進化して、電話一本でさまざまな検索やナビの設定をセンターが行ない、自分のクルマのナビに転送してくれたり、目的地がハッキリしていなくても、パソコンのようにAND検索できたりと、まるで専属ガイドさんのようにサポートしてくれる。これなら、機械音痴と言われる女性でも、恐るるに足らず。行動範囲が広がること、間違いナシだろう。

ちょっと話は逸れるが、ナビの画面表示設定を、ヘディングアップにしている人は、従順家来タイプ。ノースアップにしている人は、命令王様タイプなんて話を、ご存知だろうか。普段、女王様として君臨していると言われる私に当てはまるかどうかは疑問だが（もちろん自分ではお姫様ぐらいにしか思っていないが）、言うまでもなくナビに言われるがまま走ることしかできない私のナビの設定は、ヘディングアップだ。

ETCナシには生きられない

さて、話は進むが、ITSの中で、次に身近になってきたのは、ETCだろう。私も昨年春に導入してみた

のだが、今やETCナシでは生きられないほど、便利さを痛感している。

まず、最初に感動したのは、料金所渋滞から解放されたこと。だんだんと装着車が増えてきた今となっては、ETCゲート渋滞していることもたまにはあるが、それでも一旦停まってお金を払って……、などというプロセスを考えると、多少並ぼうが断然ラクチンだ。特に運転の苦手な女性にとっては、お財布からお金を出して、お釣りと領収書を受け取って……、などというプロセスから解放されるだけでも、運転に集中することができるぶん、かなり負担が減るに違いない。また、雨の日に窓を開けずにすむというのも、車内の快適性に敏感な女性にとっては、嬉しいことだったりするはずだ。

さらに私の場合、仕事柄いろいろなクルマに乗らなければならないので、どうやっても手が届かないような、大きな左ハンドル車を運転しているときなど、料金所をスルーできるというのは、ありがたいことこの上ない。そして、料金的にもお得になっているのも見逃せないポイントである。出口ゲートで「〇〇円お返しします」なんて言われたり、深夜の時間などで半額になっていたりとすると、メチャクチャ得した気分になる。今まで「ちょっともったいないから下道で行こうかな」なんて思っていたりしたところが「その金額なら高速に乗っちゃえ〜！」なんて飛び乗ってしまったりするワケ。

結果、高速に乗った私も時間的に得をするワケだが、下道の通行車も間接的に得をすることになる。交通量が減るわけだから、なんといっても安全性が高まるのだ。ということは、歩行者や自転車など、クルマに乗っていない人はもちろんのこと、排気ガスや騒音が減ることによって、近隣住民までもが恩恵を受けることとなる。環境問題では、悪として取りざたされがちな最近のクルマ社会にとって、安全性や環境問題に少しでも貢献というか、迷惑を掛けなくて済むというのは、なんだか清々しい気持ちになるものだ。

期待がふくらむスマートETC

その発展系として、スマートETCにも、かなりの期待を持っている。まず、入口&出口が増えるワケだから、交通的&時間の節約的に便利になるというのがひとつ。



「ナビは専属ガイドさん…」

そして、お出かけスポットが増えるということも、新たな楽しみのひとつなのだ。

最近のサービスエリアは、地域特産物が販売されていたり、温泉があったりと、テーマパークのように楽しめるものが増えてきている。ハイウェイオアシスのように巨大なものとなると、もうそこだけで1日楽しめてしまうくらい、設備が充実しているのだ。今後は、例えば〇〇展のような展示会をするのもアリだろうし、ドライビングシアターのようなものを展開するのもアリだろうと思う。お楽しみスポットとして発展するべく、さまざまな可能性を秘めていると思うのだ。

お楽しみといえば、こんなことにも期待している。例えば今後民営化となる道路公団と、観光地がタイアップを行ない、特定期間中この観光地に出かける人は、マイルが〇倍になるとか、通行料金がお得になるとか、そんなキャンペーンを行なうというのはどうだろう。観光客の誘致として観光地も得をする、利用客が増えることで道路公団も得をする、そしてもちろん私たちユーザーも得をすると、皆が得をする利用方法が編み出せるのではないかと思うのである。こんなことができるのも、双方向通信が可能なE T Cならではの特典だろう。

クルマは自分で操縦して移動できる唯一の手段

しかし、ひとつ問題なのは、今後E T C装着車が増えてくるにあたり、ゲートの位置やゲートの数を増やしていく間の交通の安全性だ。過渡期の現在、E T Cゲートに向かいにくい道路というのも確かに存在している。特に2本の有料道路が合流するような料金所では、右往左往させられることも多く、見ていてヒヤッとさせられる場面に出くわすことも多い。一般の料金所に向かうクルマと、E T Cゲートに向かうクルマには、実際の速度差だけでなく、ドライバーの気持ち的にもどうしても速度差が存在するから、その危険度はなおさら高まっているように見えるのだ。この辺りは、有料道路を管理している方をお願いするしかないのだが、日々増えてきているE T C装着車と非装着車の間で、痛ましい事故が起こらないよう、臨機応変な対応を望むところである。

そして今後このままE T Cが発展し、さらにはクルマ側もI T Sに対応するべく最新鋭装備の進化が進めば、



「E T Cで料金渋滞から解放された!」

いずれは自動運転システムというようなものが、幅を利かせるようになってくるのは、想像に難くないところだ。特に、運転の苦手な女性や、小さいお子様がいらっしゃるようなママさんにとってみれば、ドア to ドアで運んでくれる電車のようなクルマ社会は、確かに便利なものになるのではないだろうか。

しかし、クルマを運転することが大好きな私の場合、疲れているときなどは、確かに便利だろうなあとと思うが、やはり最後の最後まで自動運転システムレーンと、自己運転システムレーンは分けておいて欲しいと願わずにはいられないのだが……。

電車、バス、飛行機 etc……。移動手段は多々あれど、唯一自分で操縦して移動できる手段がクルマなのである。だからこそ、クルマもクルマ社会も、楽しくなければならぬというのが私の持論なので、サーキットでしか運転を楽しめない時代になってしまったら、やはり悲しい。

季節の移り変わりや風を感じるといった自然との対話も、歩くのとも自転車に乗るのともまた違った、クルマだからこそ楽しめる速度感というものも確実に存在する。クルマというパーソナルなようで、社会性のある空間の中だからこそ生まれる、人と人との距離間というものもある。安全と楽しさをバランスさせた、多様性を持ったクルマ社会、そして女性にもっと優しいクルマ社会を、最新鋭装備が作り出してくれることを、今後も期待し続けたいと思うのだ。

(たけおか・けい)
(イラスト/きざわ・るみ)